



奥田 弁次郎・フミ④ 地域史研究者 三善貞司

夫婦の功績が生んだ、

今に引き継がれる大阪のお笑い興行

千日前（中央区千日前1〜2丁目）開発の功労者で興行師奥田弁次郎の妻フミは、大阪の母親の代表とっていいほど人情味の豊かな女性でしたが、息子の徳次郎には絶対に興行の仕事を継がせようとはしませんでした。

ヨーロッパやアメリカで外国のプロダクションと契約の難交渉をかわした体験からか、「これからは語学や。語学を勉強しなはれ」

と幼いころからいいふくめ、徳次郎を大阪英学校（現・京都大学）に入学させます。

徳次郎は本連載 で記したように小学生のころ弁次郎から、

「こら、ごんたばかりせんと、ちつとは勉強せえ」

と叱られ、

「父ちゃんかて働いたらどや。母ちゃんいつも泣いてるやんか」

と言い返し、極楽とんぼの父親の目をさませた賢い長男です。

徳次郎は大変な秀才でした。全国から頭のいい若者が集まってくる大阪英学校で、幣原しではら喜重郎と首席を争ったといわれます。喜重郎は三百年以上は続いた門真村（大阪府門真市）の旧家の出身で、兄は歴史学者で台湾帝国大学総長幣原担、妹の操と節は女性には珍しい医学者で、福祉や産科医療で功績をあげた優秀な一族です。とくに喜重郎はイギリスやアメリカで外交官として大活躍。加藤高明内閣では外務大臣に就任、昭和6年（1931）若槻礼次郎内閣までその職にあり、戦争を避け平和外交に徹して軍部に嫌われ、戦時中は憲兵の監視下におかれた人物です。

敗戦後は鎌倉で隠居暮らしをしていましたが、吉田茂に説得され総理大臣になり、茂とコンビで大混乱の日本の再建にのりだし、平和憲法制定の道筋もつけています。その喜重郎が若いころをふり返って、

「（英学校時代は）今度の試験ではトクかキシユウか、どっちがトップじゃろ…と生徒どころか先生がたまはやしたてた」
との内容を語っています。

母フミから「これからは語学や。語学を勉強しなはれ」と言われた徳次郎は、喜重郎のように外交官にはなりませんでしたが、無類の母親孝行で、「外国へ行ったら母ちゃんがかわいそつや」と地方行政の役人になります。

大阪府はじめ各府県の実務を、税務・警察畑までは幅広く活躍しますが、生涯興行と

は全く縁がありませんでした。

時は流れ世は改まり、千日前には「アシベ倶楽部」「帝国クラブ」「浪曲愛進館」「第一第三電気館」「キネマ倶楽部」等が立ち並び、道頓堀と肩を並べる興行街・繁華街になっていきます。弁次郎とフミが茶店を建てたころは「1坪50銭やるからもらってくれ」とまで言われた土地の価格は、坪あたり300〜500円にはねあがりました。

大阪では知られた興行師播重之助は寄席を設け、女義太夫（女性の浄瑠璃がたり）の豊竹呂昇を出演させ大当たり、呂昇は超アイドルになります。天才俄師鶴屋団十郎は千日前の雰囲気が気に入り、日本ではここだけという俄常打小屋「改良座」を建設、ここで弟子の団九郎と演じた俄（即興で演じるこっけい劇。一種のパントマイム）に観客は笑いころげ、思わず小水を洩らす始末。これが上方喜劇の淵源になる「曾我廼家芝居」に大きな影響を与えています。

川上音次郎も書生芝居と称して明治政府を諷刺するお笑い劇を千日前で公演しますが、なにしろ無類の芝居下手。誰も笑わないのでやけになり、政治家の悪口に奇妙な節をつけて歌ったのが、彼の出世作オツペケーの起こりです。こう並べてみると千日前は、大阪お笑いものの発生地と言えるでしょう。

明治43年（1910）夫の弁次郎が73歳で病没すると、フミはあっさりと千日前の興行界から身をひきました。それからひっそりと暮らしたようで、大正時代のフミの暮らしについては、資料を持ちません。

昭和4年（1929）フミは92歳で眠るように息を引きとります。ふしぎなことに母親の葬儀万端をとりしきった徳次郎は、葬儀の翌日、突然心臓マヒで死亡しました。68歳です。

「あんなに仲のよい母子やったさかい、母ちゃん淋しいやる。俺がついていったるわ…となつたにちがいない」
世間はこう噂しました。

余白が出ましたので、地名千日前の起こりになった千日寺（本連載 を参照）の絵図を、江戸時代の地誌『難波鑑』から紹介しておきます。



千日寺(難波鑑)

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞